

結ぶ登山道に出る。ここで昼食をとり、あとは不動滝までゴルジュの遡行をやつて、硫黄精練所跡にぬけ高湯に出た。

(記・)

[タイム]

信夫温泉八・一五―沢八・三〇―不動沢出合九・二〇
―鼓滝一〇・〇〇―登山道一・〇〇―不動滝一二・一
〇―高湯一二・五五



不動沢・鼓滝

中流部遡行

一九七五年六月二十九日

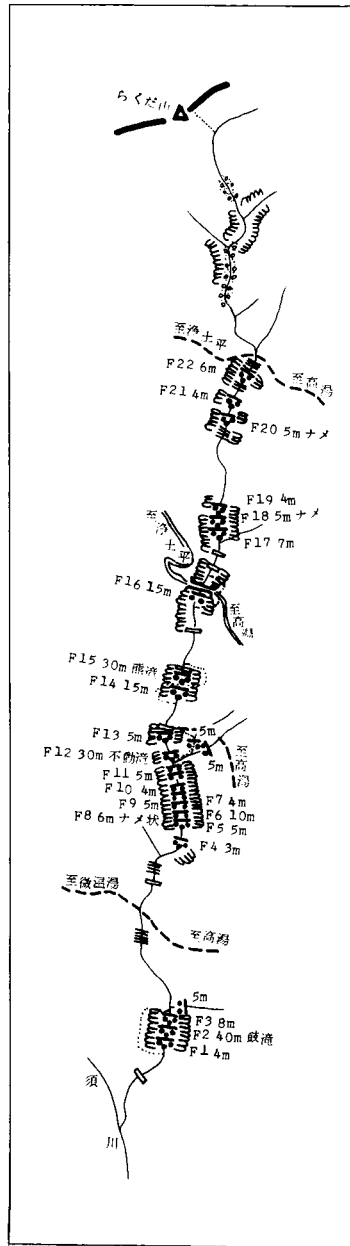
◆天気(曇一時小雨)

車で高湯まで行き不動沢に向かう。前日から阿武隈川が大増水したので心配したが、不動沢は増水していなかった。七時二〇分全員ワラジをつけて出発。小滝一つを越すとすぐに砂防ダムで左岸を簡単に乗り越える。この不動沢は砂防ダムが多く不動沢橋まで四つを数えた。

最初は平凡。樹林帯に入り暗くなり小滝を越えると、いよいよ不動沢の核心部ゴルジュ帯にさしかかる。兩岸の側壁は二〇〜五〇mといった所だが、上流に向かって低くなっている。最初の五mは深い釜のふちを腰まで水に入つてへつり右岸を直登。アンザイレンして一人一人登る。続く一〇mは滝は頭から水を浴びながらシャワークライムで突破。次の小滝二mは高さこそたいしたことないが深い釜をもっている。左岸を微妙なバランスでへつり、ザイルをわたして突破。六mナメ状、右岸を少し巻きぎみに登る。

このあと小滝が次々とあらわれるが、いずれも沢になれた人なら簡単にルートを見つけて突破できると思う。ゴルジュも終わりに近くなる頃、壁や岩に鉄分が沈着しているのが見られる。中には何となく鐘乳洞を連想させるものがある。

ゴルジュを終了すると沢が明るくなってすぐ不動滝。三〇坪の落差を一気に落下するのは見事である。不動滝はとても直登できないので大きく左岸を捲く。少し戻って左岸から流入する小沢に入る。小沢はすぐ二分しどちらにも滝がかかっているが、左側の滝を登る。岩がもろく浮き石も多いので注意が必要だ。滝を登りきった所で



不動沢 (作図:)

すぐ左へヤブをこげばぽっかり昔の登山道に飛び出す。昔はかなり歩かれたにちがいない道だが、どこから登ってきているのかわからない。これを登ると昔の硫黄精練所のところの道へ出る。

沢に入って二時間ばかりである。高湯が眼下に見おろせて、時間の割に距離をかせいでいないのに多少がっかりする。車道に出た所で左に曲がり沢に降りれば砂防ダムのすぐ上である。下に小滝が二つ程確認できた。

また沢を登りはじめたが、前の小沢が温泉のまじったあたたかい水だったので、水の冷たさに身ぶるいする。明るい平凡な登りがしばらく続いて一五メートル滝。右岸のブ

ツシュ帯を捲く。次の三〇ノ（熊滝）は上に五ノ程の高さの砂防ダムをのせている。左岸の高捲きで上に出る。

再び平凡となるが、今度はゴミが目立ってくる。砂防ダムを越えるともう不動沢橋だ。一五ノ滝がまつている。岩がもろくて危険なので、少し戻って左岸のガレ場を登り、スカイラインへ出る。（記・一）

〔タイム〕

高湯七・〇〇―不動沢出合七・一〇―不動滝九・三〇
―不動沢橋一一・三〇

上流部廻行

一九七五年七月十四日

◆天気（晴）

久しぶりの太陽を拝みながらの快適な沢登りを楽しんだ。高湯から不動沢に入り廻行を開始する。水量は減っているし、三度目の入谷でもあるのでピッチははかどる。ゴルジュ帯も最初の滝の直登に多少手間どった他は不動滝まで一気にかけぬける。不動滝から上の砂防ダムまで大きく高捲いて更にピッチを上げる。

不動沢橋の上に出たのが一時少し過ぎと快調なペースだ。昼食をとり橋の横を伝って沢床に降りまた沢を登りはじめる。砂防が二つあり、いずれも左岸を捲くが沢は平凡だ。やがて七ノの滝。水量が多くてシャワークラームは危険なので左岸にとりつき高捲く。この上はナメが続いていた。また平凡な沢にもどり退屈しはじめころ、五ノのナメ滝である。このあたりのナメはきれいだ。これをすぎればまた平凡。滝を期待してなおもつめてゆくと四〇ノのナメがあつて、その奥に六ノの滝がある。右岸を登りその上のナメをすぎると沢が二分した。ここ



不動沢・不動滝